

2023年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(秋期・一般選抜) 問題

外国語試験 日 本 語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

成	
績	

2023年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(秋期・一般選抜) 問題

外国語 (日 本 語)

1、次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人によって頻度または強度の差はあろうが、誰でもときには自己嫌悪にかられることがあるであろう。広い世界にただ一人、いちばんかわいいはずの自分を人間はなぜ嫌悪するのであろうか。何のためにか。他人に嫌悪されたのなら彼から遠ざかれはすむが、自分に嫌悪されてしまった自分はどこ逃げ出せばいいのだろうか。どうして人間は自分を追いこめるようなそんなひどいことを自分に対してするのであろうか。

わたしは長いあいだ、この種の疑問に囚われていた。フロイトの死の衝動または破壊衝動をもち出して、自己嫌悪はそれが自己に向けられた場合の諸形態の一つであると言ってみたところで、何の説明にもならない。他の人びとの場合と公平にくらべてみたわけではないが(そんなこと、できるはずもない)、わたし自身としては、相当自己嫌悪が強いほうではないかと思っていた。酔っ払って④はしたないことを口走ったり、ひよつとして⑤いう助平根性を出して⑥虫のいいことを頼んで断わられたり、つい(2)卑怯未練なことを仕出かしてしまったり、 つかぬことを自慢してしまったりしたあと、わたしは激しい(3)自己嫌悪に⑦陥り、頭痛と称して丸一日、ふとんをかぶって寝込んでいたりした。そして、何のための自己嫌悪かという問題を考えることで、かろうじて自己嫌悪に耐えていた。以下は、自己嫌悪に陥ったときの折にふれての断片的考察を「ものぐさ精神分析」を書くこの機会に一通りまとめてみたもので、わたしの自己嫌悪に関するわたし自身のものぐさを考察であり、他の人の自己嫌悪について同じことが言えるかどうかは知らない。読者諸賢よ、あなたはよく自己嫌悪を感じますが、もしそうなら、あなたの自己嫌悪の場合はどうでしょう。

まず、自己嫌悪という以上、自分を嫌悪する自分と、自分に嫌悪される自分が存在するわけである。存在するものはすべて合理的であるとまでは言わないが、正当な理由にせよ不当な理由にせよ、それなりの何らかの理由があるから存在していることは間違いない。では、^A「嫌悪される自分」が存在する理由は何であらうか。嫌悪されるのは、つねに、現実^Bに自分が行なったある行為である。それらの行為を考察してみると、つねに、自分の何らかの欲求を満足させたか、または満足させる可能性のあった行為であることがわかる。虫のいいことを頼んだのは、ひよつとしてもし承諾してもらえたら、うまい汁にありつけるからである。卑怯未練なことを仕出かしたのは、ある利益または快楽を、それを得る⑧正々堂々とした手段がないにもかかわらず、あきらめ切れなかったからである。あとから「はしたない」とか「 つかぬ」とか判断するとしても、それを口走ったり自慢したりしていた時点では、いい気分だったのである。すなわち、それらの欲求は、現実の行為を惹き起こす力のある現実的欲求である。いかえれば、「嫌悪される自分」とは、まがことなき現実の自分である。

それに反して、「嫌悪する自分」には、どこを探しても現実的基盤が見つからない。自己嫌悪は、嫌悪された行為の再発を⑨止める力をもっていない。酒に手を出しては後悔して禁酒を誓い、また酒に手を出すアル中患者と同じように、自己嫌悪の場合も、あればと激しく自分を嫌悪しながら、同じような場面になると、また同じ

ような行為を繰り返すのである。本来なら、嫌悪は、嫌悪の対象の④ （イ）あるいは消滅の方向に作用する力をもっているはずのものである。それなのに、その力がないとすると、自己嫌悪の場合の嫌悪は、果たして本当に嫌悪なのかと疑わしくなってくる。少なくとも自己嫌悪は、現実の自分に基盤をもっていない。「嫌悪する自分」とは、いわば、架空の自分であり、架空の自分に発するものであるがゆえに自己嫌悪は、現実の自分に対して影響力をもたないのである。

^B 自己嫌悪とは、つまり、「架空の自分」が「現実の自分」を嫌悪している状態である。ではこの「架空の自分」は何の必要があつて存在しているのであろうか。「架空の自分」とは、要するに、はしたないことを口走らない自分、卑怯未練なことを仕出かさない自分である。いいかえれば、人にそう思ってもらいたいところの自分、自分でそう思いたいところの自分である。すなわち、「架空の自分」は、社会的承認の必要と自尊心とに⑤ （イ） 欠えられている。「架空の自分」なんかない方が、「現実の自分」の欲求を自由に満足させることができ都合がいわけだが、それでは、社会的承認を失い、自尊心が傷つく危険があるわけである。

（岸田秀『ものぐさ精神分析』〈中公文庫〉による。250 ～ 252 頁）

問一 傍線部(1) ～ (5) のカタカナは漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで記せ。

- (1) (2) (3) (4)
- (5)

問二 二重傍線部(A)「はしたない」について、本文中での意味を簡単に説明せよ。

問三 二重傍線部(B)「虫のいいこと」とあるが、「虫のいい」という語を用いて短文を作文せよ。

問四 空欄に共通してあてはまる最も適切な語を次の中から選び、○で囲め。

- ① 似も ② 鼻にも ③ 及びも ④ 愚にも

問五 傍線部 A 「嫌悪される自分」が存在する理由は何であろうか」とあるが、その「存在する理由」を筆者は何であると考えているか。本文の内容に即して説明せよ。

問六 傍線部 B 「自己嫌悪とは、つまり、「架空の自分」が「現実の自分」を嫌悪している状態である。」とあるが、筆者が考える「自己嫌悪」とはどのようなものか。「嫌悪する自分」「嫌悪される自分」という語を用いて、本文の内容に即して説明せよ。

二 問一 二に答へよ。

問一 次の文中の空欄 ① ～ ⑩ に当てはまる平仮名二文字を入れよ。答えは文中の () 内に直接記入せよ。

「いい問いの立て方」を考える ① () あたり、直ち ② () 三つ、思いつくことがあります。

一つ目は、「いい」という言葉の意味。いいとは、「良い」 ③ () 「善い」か。前者なら、基準なり指標なり、何かしらの尺度が必要となります。

二つ目は、「問い」とは何か、ということ。調べれば答えがわかる問い ④ () あれば、答えなどない問いもある。前者は「問題」や「質問」と呼ばれるものだろうし、後者は「課題」や「テーマ」、「目標」の類い ⑤ () なるでしょう。

三つ目は、そもそも いい問いの「立て方」という何かしらの方法論があるのか、ということ。言い換えるなら、いい問いを見つけようと思つて見つけられるような問いが、果たして「いい問い」であるのか、という疑問です。

のづから元 ⑥ () 干渉ない物言いです。そもそも論から考えるような思考の仕方こそ ⑦ ()、ほんものの「いい問い」をもちうる唯一 ⑧ () 方法と考えます。目新しいベウツ的なやり方も大事で ⑨ () ありますが、むしろそういうやり方を生む思考のほう ⑩ () より根本にあるのは間違いないことですから。

(宮野公樹『問いの立て方』ちくま新書) による。13～14頁

問二 次の文中の空欄 ① ～ ⑩ に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。なお、二箇所ある ⑧ には同じものが入る。

ことは世界への縁である。私たちは日々の生活の中で、特に意識することなく、ことはを ①) 世界を見たり、ものごとを考えたりしている。あらためて、ことは私たちの日常にどのような ②) を果たしているのか、ことはかない ③) とはどのようなものなのか、などと考えることはめったにあるまい。だが、ことは私たちの世界の見方、認識の仕方と一体どのようなかわりを ④) のだろうか。

⑤) 私たちは、「水」がどのようなものか知っている。では、「水」ということを知るようになる以前の小さな子どもは、「水」を大人のように理解していないのだろうか。「縁」という色は、どのような。「縁」ということを知らない子どもは、「縁」という色を大人と同じように理解していないのだろうか。「左」ということをまだ知らない子どもは、その同士の位置関係を大人と同じように理解していないのだろうか。

同じ問いを次のように ⑥) することもできる。「左」ということを持たない言語を話す人たちは、私たちが「ほい、縁はうちの左側にあるよ」と言いたく状況で、どのようにその情報を ⑦) のだろうか。そして、そもそもそのような言語を母語とする人たちは、その同士の位置関係についての理解の仕方や、自分の行く場所を ⑧) 、空間の中でそのを ⑧) する仕方が、私たちと違うのだろうか。「縁」に ⑨) 語を持たない言語の話し手は、私たちが「縁」と呼ぶ色に対して私たちと違う ⑩) をするのだろうか。

(金井ひづみ『ことはと思考』(岩波新書)による。2～3頁)

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

子どもが生まれたら、その子といっしょに酒が飲める日をたのしみに待つ、という親の話はよく聞きます。でも、いっしょに本を読む、あるいは本の話をするのをたのしみにしている親御さんも多いのではないのでしょうか。そんなふうに待たれている家庭に生まれてくる子どもは幸せです。もう生まれる前から、その子の生活のなかには、本が存在しているからです。

わたしのような立場にいる者は、「子どもを本好きにするには、どうすればよいか」というお尋ねを受けることがよくあります。わたしの答えは、いつもきまっています。生活のなかに本があること、おとなが本を読んでやること、のふたつです。実際、子どもを本好きにするのに、これ以外の、そしてこれ以上の手だてがあるとは思えません。

子どもが最初に本と出会う場所は、家庭です。家庭であってほしいと思います。うちのなかに本があり、親が本を読んでいる姿を見る。それが、子どもには、本への第一歩です。この世の中には本というものがある。紙でできていて、外側は固く、味はあまりよくない。開くと、なかにうすい、ひらひらしたものがあつて、それには黒い点々がある。ときどき、絵も入っている。おとなたちが、それを手にしていることがあるが、そのときはおおむね静かだ、といったことが、本がある家庭に育つ子どもたちの、本というものに対する最初の認識でしょうか。

本が、身のまわりに普通にあるものとして自然に子どもの意識にはいつてくる。それを読むという行為にも、まわりのおとなたちがしている日常のあたりまえのこととしてなじんでいく。それがいちばんです。家族がよく本を読む家庭では、子どもたちは、本を読むおとなの姿に、食事をしたり、掃除をしたりしているときのおとなとは違う、集中と忘我(?)の空気を感じとることでしょう。子どもたちがそれを見て、本のなかに何かたのしいもの、こころをひきつけるものがあるのだなと感じてくれたら、本への第一の扉は開かれたといつていいと思います。

読めなくても、読んでやらなくても、本があるだけでいいのです。ある作家の方が、自分のうちには父親の蔵書がたくさんあつた。自分はそれをまったく読まなかつたけれど、でも、本棚から射してくるもの、いわば本が発するオーラを浴びて育つた。それは、よいことだつた、と書いておられるのを読んだことがあります。それ以来、わたしも、本＝オーラ説を受け売りすることに努めています。

図書館には来るけれど、遊んでばかりいて、ちつとも本には手を出さない子がいます。それでもいい、本のオーラを浴びているのだから、とわたしは思います。たとえ本を読まなくても、その子の頭のなかには、本というものが(背景として)意識されるでしょう。もしかしたら、そのうちに、そこに並んでいる本のタイトルが、ひとつかふたつ記憶されるかもしれません。そして、いつかどこかで、その記憶が、その子が本を読むきっかけをつくるかもしれません。少なくとも、本のあいだに身を置いた体験は、けつして不快なものではなかつたはずです。本が快い記憶とともにある、それだけで十分だと思うのです。

もう、五十年余りも前のことになりますが、ニューヨーク公共図書館で、子どもたちの「お話の時間」を見学したことがありました。児童室は、半地下にあつて、お話は、そこからずいぶん離れた小さな部屋で行われました。子どもたちは、お話の部屋へだとり着くまでに、長い旅をしました。エレベーターに乗り、吹き抜けになつて上る階から、広大なロビーと、そこに並べられた何列ものカタログケース——蔵書を検索するためのカードがおさめられている

箱——を見下ろしながら、地図や、稀観書きかんしよのコレクションをはじめとする、膨大な蔵書のなか
を、通り抜けて進むのです。

本もさることながら、そこには本を読み、調べ物をする人たちが大勢見えます。子どもたちのうしろからついていきながら、どうしてこんなに遠くの、不便な(と思われる)場所まで、子どもをつれていくのだろうと、ふしぎに思ったのですが、考えてみると、この巨大な図書館の内部を通り抜けるという体験自体が、子どもにとって、またとない教育だったのかもしれない。この場所の重厚な雰囲気からは、それこそ知のオーラが圧倒的な量と力で放出されていましたから。

(松岡享子『子どもと本』(岩波新書)による。 53 ～ 56 頁)

[illegible]